

竜騎士殿下の聖女さま



ツヴァイ

カーリアの従者。
一見、人当たりの
いい青年だが……。



カーリア

たまごし
玉の輿を狙う子爵令嬢。
聖女の新菜が気に入らない。



アン

王宮で新菜に付けられた
専属の家庭教師。
厳しく優しい女性。



ヨルン

国一番の実績を持つ
魔道具と魔法の研究者。
王宮内の時計塔に
引き籠もっている。



サリー

ギルと契約する
精霊・サラマンダー。
大きな竜に姿を変える。



ギルベルト(ギル)

偶然新菜を助けた旅の竜騎士。
彼女が聖女と知り
王宮までの案内役を申し出る。
女性の扱いに長けた
ワイルドな美丈夫。

橘 新菜

突然、聖女として
異世界に召喚された普通のOL。
ある方法で、膨大な魔力を
溜めることができる。
明るく行動力があり常に前向き。

プロローグ

「新菜、違うんだ！ これは……」

「うっさい隆二！ 違うも何も、私が見ているこの光景が全てでしよう!?」

新菜は仁王立ちで、恋人から「元」恋人に成り下がりそうな全裸男を睨みつける。

場所は新菜と隆二が同棲しているアパートの寝室だ。二人で使っているダブルベッドの中では、長い金髪を緩く巻いた女性が裸の上半身をシートで隠しこちらを眺めていた。

顔面蒼白の浮気男は冷や汗をかきながら、しどろもどろに言葉を紡ぐ。

「こ、この子は大学時代の後輩で……その、失恋したから慰めて欲しいって言われて……。信じてくれ、決して俺が望んだわけじゃ！」

「黙れ！ この浮気男！」

「本当なんだ！ 俺が愛しているのは新菜だけだ！ 頼む！ 捨てないでくれ！」

「えー。でもお、隆二さん『あの女にはもう飽き飽きしたんだ。早く別れたい』って言ってたじゃないですかあ」

「わああああああ!!」

金髪女の冷めた声をかき消すように隆二が叫ぶ。その行動こそ金髪女の言葉が真実だと物語っていた。

新菜は怒りに拳を震わせ、地を這うような声を出す。

「ふーん。へえー。そうなの」

鬼の形相を浮かべた新菜に、隆二はびくりと肩を震わせすくみ上がった。

「……じゃあ、別れてやるわよ！ この、能なし浮気ヒモ男があ!!」

そう言つて、渾身の力をこめて放つた拳は男の顔面にクリーンヒットした。隆二は大量の鼻血を噴きながらベッド脇まで飛んでいき、そのまま気絶したようだ。

新菜は鞆を引つ掴み、一度も後ろを振り返ることなくアパートを後にした。それが橘新菜に起こつた一時間前の出来事である。

新菜は、当てもなくふらふらと暗い夜道を歩いていた。時刻は現在九時。

頭上には星が瞬いて、綺麗な満月が新菜を見下ろしている。

新菜は現在二十五歳。ついて欲しい所に肉はつかない癖に、つかなくてもいい所にはちゃんとお肉がついている、普通のOLだ。

高校卒業後から勤めている会社は、社員を馬車馬のように働かせることをなんとも思わない、所謂ブラック企業と呼ばれる会社だった。なので、新菜の帰宅時間は毎日かなり遅い。

いつもなら夜の十時や十一時を回ってしまうのだが、今日に限って早く帰れたのだ。

久しぶりに隆二とご飯を食べてゆつくりできると鼻歌を歌いながら帰宅した新菜は、そこで彼の浮気現場を目撃してしまったのである。

その時の絶望感たるや筆舌に尽くし難い。

新菜は深くため息をついて、空を見上げる。肩より少しだけ長い黒髪が風に靡いた。

三年も付き合つた彼から裏切られたというのに、不思議と涙は出なかった。彼に対する怒りは感じて、何故か悲しいとは思わない。

新菜の口から、再びため息が漏れる。

あのアパートに戻る気にはなれなかった。それに、自分以外の女が寝たベッドを使う気にもならない。

「今日どこ泊まろう」

新菜はひとまず、今晚はどこか別のところで頭を冷やし、明日、浮気男をアパートから追い出すつもりでいた。こんな時間に訪ねても笑って許してくれる友人はいるのだが、迷惑をかけることも浮気されたことを言うのもなんだか気が引けた。

「とりあえず、ビジネスホテルかなあ」

新菜は駅前のビジネスホテルを目指す。まっすぐ前を向いて暗い夜道を歩いたら、視界の端で何か光った気がした。何気なくそちらを見た新菜は、思わず息を呑む。

光の正体は流れ星だった。

それも一つや二つじゃない。たくさん流れ星が新菜の視界を横切っていく。

「凄いつ……!」

見たこともない美しい光景に、新菜の心臓がドクリと音を立てた。瞬きをするのも忘れて、光の雨のような光景を瞳に焼き付ける。先程までの怒りも、情けなさも、全て洗い流されていくみたいだ。

おそらくこれは、流星群というやつだろう。新菜は呆けた頭で、無意識に言葉を紡いでいた。「私を愛してくれる人が現れますように……」

思わず口にした新菜の願いに呼応するように、流れ星の勢いが増していく。やがて、新菜の視界が星々の光で埋め尽くされた。そこで初めて、新菜は自分の見ているものの異常さに気が付く。

「え!? な、なに!？」

次の瞬間、目を開けていられない程の強い光が新菜を包んだ。

そして襲った独特の浮遊感。

恐る恐る目を開いた新菜が見たのは、一面の青空だった。

ゴーゴーと音を立てて新菜の横を凄まじい速さで雲が過ぎ去っていく。

息を吞んで前方に目をやれば鬱蒼とした森の木々がグングンと近付いてくる。

(いや、森が近付いてくるんじゃないかと——私が落ちてる!?)

新菜は一瞬で自分の置かれた状況を理解した。

どういうわけか、自分は今、とんでもない高さから地上に向かって落下している。

これは死ぬ。間違いなく死ぬ。

「きゃああああああああ!!」

新菜の喉から、未だかつて出したこともないような悲鳴が飛び出した。恐怖で目を瞑れば、心臓の音がやけに大きく聞こえた。

新菜は地上にぶつかる覚悟を決める。要するに死ぬ覚悟だ。何がどうしてこうなったのか、いろいろ疑問や無念はあるものの、森の木々が米粒以下の大きさに見えるぐらいの上空から地面に落ちるのだ。痛みを感じる間もなく一瞬で死ぬだろう。それだけが唯一の救いだった。

新菜は衝撃に備えてぐっと身を硬くする。しかし——

「は? なっ……!! お、女っ!？」

ひっくり返った男の声が聞こえたかと思っただ直後、彼女の背中には弾力のある何かの上に落ちた。咄嗟に触れた何かは、つるつとした蛇やワニの鱗のような感触だ。

新菜が落ちた衝撃で上下に撓んだ何かは、しなやかに形を変えて彼女を受け止める。

そして新菜の身体に太くて弾力のあるものが巻き付いてきた。

思いがけず落下は止まったものの、結構な高さから落ちた衝撃は凄まじく、新菜は肺の空気を全て出し切つて低く呻く。

「——っ!」

痛みを溢れそうになった涙を、新菜はぐっと堪えた。

状況を把握しようにも、あまりの痛みで頭が上手く働かない。かろうじてわかるのは、自分が死

ぬのを免れたということだけだった。

新菜は全身を襲う痛みをなんとかやり過ごし、恐る恐る目を開ける。最初に目に飛び込んできたのは「何か」に跨がる男の後ろ姿。

更には、その跨がっている「何か」は空を飛んでいるようだった。

どうやら新菜は、落下途中にその「何か」に助けられたらしい。

新菜は状況が上手く呑み込めないまま男の後ろ姿を見つめた。

燃えるような赤い髪に、重そうな甲冑を身につけている。その男がゆっくりと新菜を振り返った。鼻筋の通った端正な顔つきに、髪より少し暗い赤い瞳。男らしく武骨な輪郭に無精ひげが生えていた。オジサマと言うには若いのが、青年と言うには少々無理がある気がする。

男は怪訝そうに眉を寄せ、新菜を上から下まで眺めてこう言った。

「お前、いったい何者だ？」

第一章

男の乗った「何か」はゆっくりと降下し、森の中の少し開けた場所に着地した。

地面に下ろしてもらった新菜は、ポカんと口を開けて目の前にそびえる「何か」を見上げる。

「竜……？ ドラゴン……？」

新菜は先程まで自分が乗っていたものに度肝を抜かれた。

木の幹のように太い後ろ足に、鋭く尖った爪の付いた前足。背にはコウモリのような羽が二枚ついている。目の前の大きな塊は、おとぎ話や物語の中で見ることがない「竜」や「ドラゴン」と呼ばれるものに酷似していた。

その大きな身体を覆う鱗は、操っていた男の髪の毛と同じ赤色をしている。爬虫類独特のギョロリとした目は新菜をじつと見つめていた。

その眼光の鋭さに新菜が息を呑み、身を震わせると、隣から優しく声がかけられる。

「怖がる必要はない。……サラー」

赤髪の男の言葉と共に、その竜は一瞬にして燃え上がり、瞬き一つでいなくなってしまった。

目の前で起こった出来事が信じられず、新菜は声を震わせる。

「き、消えた？」

まるで白昼夢を見ているかのような状況に、新菜は自分の頬を捻り上げたくなった。

何故か突然空を落下していると思ったら、物語の中でしか見たことがない大きな竜が目の前に現れて自分を救い、そして一瞬で消えたのだ。

落下の際にぶつけた背中の中の痛みが、これはまぎれもない現実だと訴えかけているが、夢だと言われた方がまだましだった。

そもそも、ここはどこなのだろうか。新菜は改めて周りを見渡した。

先程まで自分は閑静な住宅街で星を見上げていたはずだ。それなのに、今は鬱蒼とした森の中で

太陽を見上げている。

「やっぱり夢でも見てるんじゃない？」

混乱したままそう零した新菜の上に落とされたのは、呆れたような、それでいて優しい声だった。「そんなわけないだろう。ほら、ここだ」

きゅっ！ と甲高い声を上げて、彼の肩から赤いトカゲが顔を出す。

いや、正確にはトカゲではない。背中に立派な羽が生えた、ちび竜である。その姿を見た瞬間、新菜は思わず黄色い声を上げた。

「かーわーいーいー！」

するとそのトカゲは、パタパタと新菜に飛びついてきた。

「こらサリー！ 素性のわからない相手に勝手に懐くな」

咎めるような台詞だが、男の口調は子供に言い聞かせるみたいに優しい。本気で止めようと思っ

ているわけではなさそうだ。

彼は新菜のことを敵とは思っていないらしい。

「本当にかわいい！ あなたサリーって言うのね？ この羽……凄くよくできてるけど、もしかして本物？」

「あつ！ こら、あんまりつくな。羽はデリケートな部分なんだぞ」

男の少し焦った様子に、新菜は慌ててサリーの羽から手を離し、その背中を優しく撫でた。

「そうなの？ ごめんなさい。壊す気はなかったのよ」

「それを言うなら『怪我をさせる気はない』だろうが。羽に穴が空いたらしばらく飛べなくなるんだ。大事に扱ってくれ」

その言葉に、新菜は「えっ？」と目を丸くした。

そういえば、彼はあの大きい竜のことも『サリー』と呼んでいなかったか？

大きな竜が消えて、代わりに現れた小さなトカゲ……

もしかして、もしかすると、この小さなトカゲとあの大きな竜は同一人物ならぬ、同一動物なのだろうか。

「あ、あなた、あの大きな竜なの？」

答えるはずもない相手に、新菜は思わず疑問をぶつけた。すると赤いトカゲが機嫌よさげに喉を鳴らし、彼女に首を擦り付けてきた。

『そうだよー！』

「へ……？」

突如聞こえてきた甲高い声に、新菜はパチパチと目を瞬かせる。聞き間違いかと思い、辺りを見渡すが、新菜とちび竜の他には甲冑を着た赤髪の男しかいない。彼からあんな子供のような甲高い声が出るとは到底思えなかった。

新菜は手の中の赤いトカゲをじっと見て、恐る恐る声をかける。

「あなた……なの？」

サリーと呼ばれたトカゲは、きゅるるると喉を鳴らしたただだった。

やはり新菜の勘違いだろう。そう思った矢先、今度は先程よりもはっきりと、甲高い声が直接脳内に響き渡る。

『なにがー？』

「ひゃっ！」

思わず両手で頭を押さえた。宙に浮かんだ赤いトカゲは、パタパタと羽を動かし新菜を見ている。

「……あなた、話せるの？」

「は？」

その瞬間、赤髪の男が素っ頓狂な声を上げた。

しかし、そんなことに構ってられない新菜は、目の前のサリーとの会話に集中する。

会話といってもサリーの言葉は脳に直接流れ込んでくるのだ。端から見れば、新菜の言葉に対し、サリーがきゅーきゅーと甲高い声を上げているようにしか見えないだろう。

『話せるー！』

「サリーって賢い竜なのね！ えっと、竜……なのよね？」

『サリーはね、サラマンダーだよー！』

「さらまんダー？ 何それ？ 竜じゃないの？」

『サラマンダーはね、サラマンダーだよ！ 火を司る精霊だよ！ 今はギルと契約してるの。ギルはとっても優しいよ』

喋るトカゲに、竜に、精霊。自分の許容量を超える単語と状況の数々に、新菜は軽く眩暈がした。

しかし、呑み込めるだけ呑み込んでおこうと、新菜はぐっと気を引き締める。

「そうなのね。精霊、とかはよくわからないんだけど、彼はギルって言うのね？」

確かめるように、新菜は隣に立つ男を見上げた。

「なんで俺の名を……」

ギルと呼ばれた赤髪の男は驚いた顔で新菜を見つめる。その表情は思いっきり引きつり、まるで信じられないものを見るような目をしていた。

「なんでって、サリーが教えてくれたから」

そう言うと、男がはっきりと顔色を変える。

「……お前、まさかとは思いますが、本当にサリーと話せるのか？」

相手の様子に、新菜の方が戸惑ってしまう。

「えっと、……普通は話せないの？」

「精霊と話せるのは、神か、神が遣わした者だけだ」

二人の間に重い沈黙が流れる。その沈黙を破るように、ギルが口を開いた。

「突然空から落ちてきた上に、サリーと話せるということは……お前、あの『聖女』か？」

「何、その恥ずかしすぎる呼称……」

新菜は隣にいるギルを見上げながら、なんとも言えない引きつった顔をしたのだった。

「で、お前はその二ホンとかいう世界からこっちに来たわけか？」

「正確に言うと、日本っていうのは世界の名前じゃなくて、私の住んでた国の名前ね」
新菜はひとまず、自分の身に起こった出来事を洗いざらいギルに話した。どんなに否定したくても、状況的に新菜は今まで暮らしてきた世界とはまったく別の世界にいる。

つまり異世界転移をしてしまったようなのだ。
(ほんと、夢なら早く覚めて欲しいわ……)

ギルの話によると、この世界には電気やガスや水道といった、日本で言うところのライフラインが存在せず、代わりに魔法や魔術が発達しているという。

ついでに言うと、サリーのような精霊や魔物が当たり前のように存在しているらしい。

まさにここは“剣と魔法の世界”そのものだった。

そして、新菜は“聖女”となるべくこの世界に呼ばれたらしい。

「私みたいな人って多いの？ その、聖女として……別の世界から来るって人」

「多くはないが、一定の周期で起こると聞いたことがある。国が乱れた時などに現れ、不思議な力で人々を救うのだと。以前現れたのは、確か百三十年程前だったか？」

「つまり、聖女は国を救うために召喚しょうわんされるってこと？ でも、見る限り戦争とか起こってそんな雰囲気ないけど……」

国が乱れると聞いてイメージするのはやはり戦争だろう。そう考えて尋ねたのだが、ギルは静かに首を振る。

『『国が乱れる』といつても、理由は様々だ。外の国に知られてはいけない秘密が漏れもそうになっ

ている、というのも立派な国の危機だ」

そう言うギルの顔ほどことなく暗い。それを不思議に思いながら新菜は声を張った。

「で、でも、私、そんな人を救う力なんて持ってないし、何かの間違いじゃ……」

「いや“聖女”だろう。あんな上空から身一つで落ちてくる女を俺は初めて見た。魔法や魔術を使ってもあんな上空までは飛べないからな。それにお前はサリーと話せただろう。これまでの聖女も能力は違えど、精霊と心を通わせることができたらしいからな」

「……そ、そう」

彼と話していると、嫌でも『異世界転移』が確信へと変わっていく。

話し始めて一時間も経つ頃には、新菜は自分の身に起こった事態を受け入れざるを得なくなっていた。

「なんか荷が重いわあ……。そもそも“聖女”って何をすればいいわけ？ どこまですればお役御免なのかも神のみぞ知るってやつ？ 何その終わりのないゲームみたいな。本気で辞退したい。

第一、私に聖女の不思議な力なんてないから。あったら助けてもらおう前に自分で飛んでたわよ！」

「まだ発現していないだけかもしれない。まあ、気長に待てばいいじゃないか“聖女様”」

ニヤリとからかうように笑うギルに、新菜はこれでもかと顔をしかめた。

「やだ、それ恥ずかしい。私“聖女”なんて柄がらじゃないし」

「そういえば名を聞いてなかったな。なんと呼べばいい？」

「橘新菜よ」

「タチバナニーナ？」

「……新菜でいいわ」

「ニーナだな。サリーから聞いたかもしれないが、俺はギルベルトだ。今まで通りにギルと呼んでくれ。今は理由があつて旅をしている」

そう言つて笑顔で差し出されたギルの手を新菜はおずおずと掴んだ。するとその手をぐいっと引っ張られ、頬にキスをされた。チュツと音を立てて離れていく唇に新菜の全身が栗立つ。

「よろしく」

なんでもないように言うギルの頬に、新菜は渾身の平手打ちをお見舞いした。

「セクハラ反対いいい!!」

ギルは張られた頬を押さえて目を白黒させていたが、同じく頬を押さえて真っ赤になつている新菜を見て何かを察したらしい。そして、頬へのキスがこの世界の挨拶だと教えてくれた。

新菜はそれを聞き、思わず内心で「欧米か!」と少し古いつつこみを入れた。とはいえ、これは完璧に新菜が悪い。

急いでギルに謝ると、何故か腹を抱えて笑い出された。

何がそんなに可笑しいのかわからないが、とりあえず怒つてなさそうな彼の態度に胸を撫で下ろす。

それからギルは、新菜に聖女についていろいろ教えてくれた。

元の世界に帰る方法があることも……

その方法は、この国を救つた後、聖女が願えば元の世界に帰れるというものだった。

これまで何人も聖女がこの国にやつて来て、そしてそのほとんどが使命をまっとうし元の世界に帰つて行ったのだという。

「どうして神様はこの国だけを贖するの？ この世界には他にも国があるんでしょ？」

ギルはその言葉に少しだけ驚いたように目を見張り、そして、「本当に何も知らないんだな」と呟いた。

「お前のいた世界ではどうだったか知らないが、俺達の世界にはそれぞれその国を守護する神が存在する。神は自分の守護する国に恩恵をもたらすんだ。国が滅べば、その国を守護していた神も滅ぶ。だから、神は俺達を守ることで国を栄えさせようとするし、俺達も自国の神を信仰し大切にす。それがこの世界での神と人とのあり方だ」

この世界で神と人は相互扶助の関係にあるということなのだろう。前の世界と比べて人と神の距離が明らかに近い。

つまり、ギルの言葉を借りれば、この国を守護する神が国の危機を察して聖女として新菜を召喚したということになる。

ならば、この国の危機とはなんだろう？

疑問に思つた新菜は、ギルにその疑問をぶつけた。だが、ギルは少し目を泳がせて、「なんだろうな」と答えただけだった。

ギルのその態度に新菜は眉を寄せて口を尖らせる。

「ギル、それは何か知ってるって顔よね。私にも関係あることなんだから正直に話してよ」

「まあ、王宮に着いたら、な」

「王宮？」

新菜はきよとんと首を傾げる。何故そんなところに行く必要があるのかと言外に問えば、ギルは新菜を安心させるように微笑んで、彼女の頭を優しく撫でた。

「お前の身元を保証し、保護してもらうためだ。お前はこの世界になんのツテもないだろう？ これからこの国で生活するためには、身元をはっきりさせといた方がいい」

「え？ なに？ もしかして、ギルがそこまで案内してくれるの？」

新菜は、まさかギルがそこまでまでしてくれるとは思っていなかったもので、思いつきり目を見開いて固まってしまった。なんていう太っ腹な申し入れなのだろうか。

新菜のそんな表情にギルは眉尻を下げて、困ったような、それでいて優しい笑みを浮かべる。

「……俺はこちらの世界に来たばかりの聖女様を放置する程不信心じゃない。どちらかといえば信心深い方だ。大体、見捨てるつもりなら初めから見捨てている。これも神の思し召しということだろう」

「えっと……」

「まあ、黙って世話されているということだ。聖女はこの国の宝だ。悪いようにはしない」

「……はい」

右も左もわからないこの世界で、他に頼る相手もないのだ。新菜はギルのその優しさに素直に

甘えることにした。

「よろしくお願いします」

そう言って下げた新菜の頭をギルは優しく撫でたのだった。

そして新菜とギルは、ひとまず森の近くにある街に向かった。

ギルは道すがら、この国のことを新菜に教えてくれる。

ここはゲンハーフェンという王国で、魔法や魔術が盛んなのだそうだ。国民のほとんどが魔力を持つっていて、魔術に頼った生活をしているという。火を熾こすのも、水を出すのも、農作物を育てるのも、全て魔術で行っているらしい。

ちなみに、魔術と魔法の違いは、魔法陣を用いて発動するのが魔術、直接発動するのが魔法、なのだそうだ。そしてどちらを行うにも魔力という燃料がいる。

「つまり……電気みたいなものだと思うのいいのかな」

「『デンキ』？ なんだそれは。お前の国の独特な文化か？」

ギルと言葉を重ねる度に、新菜の世界とこの世界との違いがはつきりしてくる。

あちらの単語が通じないことも一回や二回じゃなかった。それを説明する言葉は通じるのに、それぞれの世界にしかないものについては単語の意味が通じないのだ。

そう考えると、新菜がこうして普通にギルと会話できていることが不思議に思えてくる。

都合よく、この世界の共通語が日本語だったりするのだろうか？

新菜は試しに、「この世界の言語は日本語なのか？」と聞いてみた。だが、「ニホンゴ？」と首を傾げられただけだった。

「どうやら、『同じ言語を話している』のではなく、『互いに違う言語を話しているが、理解ができる』というのが正解らしい。」

「そうこうしているうちに、目的の街に着いた。リヒシュタットというこの街は、ゲンハーフェン王国の貿易の要になつていて都市なのだそうだ。」

貿易の要というだけあつて、たくさんの人で溢れかえりずいぶんと栄えているように見えた。あちこちで商人達が大きく声を張り、店に客を呼び込んでいる。それが、活気に満ち溢れた都市の雰囲気を作り出しているようだった。

ちなみに、サリーは街の外でお留守番をしていた。ギルが言うには、「アイツも他の精霊と遊びたいだろうし、呼べばいつでも応えてくれるから心配はいらない」とのことだった。

ギルの後ろを付いて街を歩いていた新菜は、居酒屋のような店の二階に案内された。

二階といっても、外についた階段で直接上がれる造りになっていて、一階の店とはあまり関係がないようだ。

広い廊下の片側に同じような扉が三つ並んでいる。新菜はその光景を見て、住んでいたアパートを思い出し手を打った。

「もしかして、ここはギルの家？」

「家はまた別にあるんだが、まあ、仮宿みたいなものだ」

そう言つて、ギルは一番手前の扉を開ける。部屋の広さは十畳ぐらいで、中に木のベッドとチェスト、机と二つの椅子があるだけ。あまり生活感のない殺風景な部屋だった。

キッチンはなく、食事は居酒屋で済ませているらしい。部屋にトイレは付いているが風呂はなく、身体を清めるのは大衆浴場か、水で拭くのがこの世界の人の普通なのだという。

「大衆浴場へはその服のままだと目立つからなんとかしてからの方がいいだろうな。今すぐ身体を清めたいなら水を取ってくるが、どうする？」

「ありがたい。でも、今すぐは大丈夫かも。それよりもこの服つてやっぱりまずいの？」

新菜が着ているのは白い膝丈のワンピースだ。なんの変哲もないそのワンピースの裾を引っ張る。首を傾げる新菜にギルは首肯した。

「そんなデザインのドレスはこの国にない。もつと言うなら、そんなに足が出るものは娼婦だつて着ない。今日は俺と一緒にいたから何もなかったが、そんな格好で一人街に出てみる。不埒な輩に襲われても文句は言えないぞ」

「そ、それは、どうもありがとうございました」

知らないうちに助けられていたのだと知つた新菜は頭を下げた。本当にお世話になつてしまつている。その頭を軽く叩くように撫でて、ギルは先程床に置いた荷物をもう一度担ぎ上げた。

「というわけで、俺は今から必要なものを調達してくる。何か欲しいものはあるか？」

「大丈夫、なんか迷惑かけてごめんね」

申し訳なさそうに新菜がそう言つと、ギルは扉に手をかけた。

「こういう時は『ありがとう』でいい。そこに本があるからそれでも読んで留守番してくれ。勝手に外へは出るなよ」

「わかった。ありがとう」

につこりと微笑んで手を振れば、彼は扉を開けて出て行った。

「ひまだー」

ギルが出て行ってから、もう三十分以上は経っただろうか。

その間、新菜は椅子に座ってギルに借りたこの国の歴史書に目を通していった。異世界の見たこともない文字が並ぶその本を、新菜は日本語の本を読むようにスラスラと読める。

しかし、日本の歴史にもあまり興味のなかった新菜が、知らない世界の知らない国の歴史に興味を持てるわけもなく、目は文字の上を滑っていった。

「もう無理、限界。別のことしよう」

程なくして新菜は本を閉じて、ぐつと背伸びをした。背骨がぼきぼきと音を立てる。

「外出は禁止されてるし、かといって、この部屋、遊べそうなものないのよね……」

殺風景な部屋を見渡して、新菜は諦めたようにため息をつく。

どうやら寝るぐらいしか選択肢はなさそうだ。

新菜は椅子に浅く腰掛けて、背もたれに寄りかかった。

その瞬間、背中に鋭い痛みが走って顔をしかめる。

痛みが走った部分に手で触れると、ビリッとした痛みが襲ってきた。

「いったあ！　もしかしてこれ、背中痣あざになってるんじゃない？　サリーの上に落ちた時に痛めたかなあ……」

ちよつと触っただけで痛むということは、結構ひどい状態になっているのかもしれない。

新菜はその場で着ていたワンピースを脱いで下着姿になる。ざつと見た限り、部屋の中には鏡がないので必死に首を回して背中うしろの状態を確認した。

「あー、結構ひどいわ、これ……」

背中全体が内出血を起しており、特に肩の辺りは痛々しいぐらいに赤黒く染まっている。押さえると呻うめくぐらいに痛い。

こんな状態に今まで気が付かなかったのは、きっと異世界に来て混乱していたからだろう。無意識のうちに、かなり気を張っていたのかも知れない。

（薬とかギルに頼めばよかったかも。でも、これ以上心配や迷惑をかけるわけにはいかないしなあ……）

彼にはこの上ないぐらい面倒をかけてしまっている。そんな彼にこれ以上頼るのは正直気が引けた。

（……黙つとこう。別に死ぬ程の怪我けがじゃないし）

そう考えていた時、持っていたワンピースのポケットから何か硬い物がころりと床に落ちた。新菜は、足下に転がるそれを拾い上げる。

それは見覚えのない小瓶だった。もちろん、ポケットに入れた記憶もない。手のひらに収まるぐらいの小さな瓶の中には、ピンク色の液体が数滴入っていた。そして、瓶の底には魔法陣のようなものが彫られている。それは淡く光を発しながら、瓶の中の液体を吸い取っているように見えた。

新菜は、指で挟んだ瓶を光に透かすようにして眺める。

「何これ？」

見たこともない瓶に気を取られていた新菜は、不覚にも部屋の扉が開いたことに気付かなかった。

「ニーナ……そんな姿で何をしているんだ」

「ひゃあっ！」

新菜は突然聞こえてきたギルの声に飛び上がり、慌てて持っていたワンピースで自分の身体を隠した。

「お、おかえりなさい」

「ただいま。で、なんで服を脱いでいるんだ？ 欲求不満なら、俺が慰めてやるぞ」

新菜の方を見ながらにやにやとそう言うギルに、新菜は顔を真っ赤にして一歩後ずさった。

「なっ！ そんなわけないじゃない！ 服を脱いでいるイコール欲求不満って、変態オヤジの思考過ぎて引くんですけど！ サイッテー、セクハラよ！」

「セクハラ？ それに変態オヤジって……。ただの冗談だったんだが、お前は本当に遠慮がないな。女性にしてはいろいろ荒っぽいし」

「なによ。こっちの世界の女性は皆おしとやかなわけ？ すみませんね、口も態度も悪くて！」

拗ねたようにそっぽを向く新菜を、ギルは面白いものを見るような目で見てくる。そして、ゆっくり首を振った。

「気分を害したならすまない。俺はお前のような女性は好ましいと思うぞ。俺の周りにはいなかったタイプだ」

「ぜんぜん褒められてる気がしない」

新菜は半眼になり不満げにそう言う。

「本当だぞ。女に頬を張られたのも、あれが初めてだ」

「うっ……その節は勘違いしてすみませんでした」

頬へのキスをセクハラだと言って平手打ちをしたのは新菜だ。その意味を知らなかったとはいえ、あれは本当に申し訳なかったと思っている。頭を下げる新菜に、ギルは目を細め、口元に笑みを作った。

「いや、気にするな。ぜひそのままできてくれ。付き従うだけの女には飽き飽きしていたところなんだ。お前ぐらい気概のある奴の方が一緒にいて楽しいからな」

「はあ。なら、遠慮なく」

「ところで本当にその姿はどうしたんだ？」

新菜の姿を指さしてギルは首をひねる。

新菜は一瞬口をつぐんだ後、にっこりと笑みを浮かべた。

「ちよつと暑かつただけよ。それより、ねえ、これ見て！ ポケットの中に入ってたんだけど」
そう言つて新菜が小瓶を掲げた時、瓶の中にはもうほとんど液体は残っていなかった。最後の一滴を瓶底の魔法陣が吸い取った瞬間、その異変は起きた。

「\$c£%#？」

「ギル？」

「*@ \$A#b、ニーナ？」

かろうじて名前を呼ばれたことはわかつたのだが、ギルが何を言っているのか突然わからなくなつた。ギルも新菜の言葉がわからないようで、何かしきりに話しかけては首を傾げている。

(え？ 何これ……どうして急に……)

そこで新菜は、弾かれるように机の上の歴史書に目をやった。思った通り、先程まで理解できていた文字が今はただの落書きにしか見えない。

「なんで……」

思わず呟いた声はわずかに震えていた。

突然、わけもわからず異世界に飛ばされても、新菜が冷静さを保っていられたのは、ひとえに言葉が通じていたからだ。問題なくコミュニケーションが取れていたからだ。

こんな見知らぬ世界で言葉が通じないとか、冗談じゃない。とてもじゃないが、生きていける気がしない。

「ニーナ？」

ギルが心配そうな顔で近付いてくる。だが、今の新菜には彼に気を遣っている余裕はなかった。
「どうしよう……」

絶望的な気持ちになつた新菜はその場にへたり込んだ。

ギルが新菜の側に膝をつき、顔を覗き込んでくる。

「%b、√∴:@# \$？」

言葉は通じないが、その音は「大丈夫か？」と言っているように聞こえた。

力なく頷く新菜の腕を、ギルの大きな手が掴み、ゆっくりと立たせてくれる。だが、腕を引き上げられた時に背中^{あき}の痣が痛んだ。

「——っ！」

「ニーナ？ っ！」

「あー……」

ギルが新菜の背中を見て固まっている。どうやら気付かれてしまったようだ。

心配要らないのだと、こんな大したことないのだと、伝えたくてもその手段がない。新菜は逡巡^{じゆん}し、両腕でガッツポーズをして『自分は元気だ』と示して見せた。

すると、ギルは何故か更に苦しそうな顔をして、新菜をそつと抱き締めてくる。

「ギ、ギル!? 私は大丈夫よ!?」

言つたところで通じないのはわかっているが、新菜はとにかくそう言葉にした。

どうやらニュアンス的には伝わつたようで、ギルは首を振り、新菜を抱き締めた状態で頭を撫で

る。まるで、幼子せむせむしくを慰めるようなその仕草に、新菜は困惑してされるがままになっていた。

大きな手が新菜の頭を数度行き来して、それからいたわるみたいに背中あきの痣あざをすすーとなぞる。

「あっ」

思わず漏れた新菜の声にギルは片眉を上げた。そして面白そうに唇ゆがを歪める。

「ここがいいのか？」

痣あざに直接触れないようにしながら、ギルはそつと新菜の背中をなぞる。

「んんっ……。背中は弱いんだから、触らないでよっ！」

彼のいやらしい手つきに、新菜は漏れそうになる声を、歯を噛みしめて必死こじに堪えた。

「ばかつ！ 変態！ セクハラオヤジ！」

「前から聞こうと思っていたんだが、その『セクハラ』というのはどういう意味なんだ？」

「それは……。ん？」

ギルに抱き締められる形になっていた新菜は、自分達の身に起こった変化に気付き顔を跳ね上げ

る。ギルは新菜のその様子に首を傾なげた。

「どうかしたか？」

「私達さつきから普通に話せてない？」

「あ……」

「ね？」

互いの身体を離し、二人は顔を見合わせた。

「どうして、急に……」

「ニーナ、その小瓶を貸してみろ」

新菜はギルに言われて持っていた小瓶を彼に渡した。

ギルは小瓶を目の前に掲げて角度を変えてじつと観察する。その瓶底には、先程なくなったはずのピンク色の液体がうつすらと溜まっていた。

「この小瓶の底にある魔法陣はあらゆるものとの意思疎通を可能にする魔法陣だ。俺も古い書物で見ただけが、確か消費する魔力が膨大すぎて扱える人間はほとんどいないとあったな」

「じゃあ、この液体は？」

「見たところ、魔法陣はこの液体を消費して魔法を発動させているらしい。だとするならば、おそらく魔力の塊かたまりだろう。魔力は通常目に見えないものだ。もしこれが魔力なら膨大な量が圧縮されているといことになる」

新菜はギルの答えに、なるほどと頷いた。つまり、さっきの事態は意思疎通の魔法陣まじに注ぐ魔力がなくなったため、魔術の効力が切れたということだろう。

しかし、わからないことが一つある。

「瓶の中の魔力って、どうやって溜めるかわかる？」

「いや……。そこまでは俺もわからん。思い当たることがあるとすれば……。さっきの続きをするとかか？」

そうやって距離を詰めてきたギルを新菜は押し返す。

「はい！ セクハラ禁止！ 真面目な会話の時は控えてよ！」

しかし、彼の言うことも一理ある。ただ、このまま彼に任せるのは、なんとなく不安だった。

ギルは動物でたとえるならライオンだ。獅子だ。百獣の王だ。

つまり、凄く肉食ということだ。

「なんか、めちゃくちゃにされそうな気がする……」

「ん？ 何か言ったか？」

「なんでもないデス……」

それでも、小瓶の真実を確かめるのなら、相手は彼しかいないだろう。

新菜は恥ずかしさで沸騰ふっとうしかけた顔を無理やり引き締め、ギルに向かい合った。これからするのは単なる『実験』なのだとも度度も自分に言い聞かせる。

「あの、これから実験しようと思うんだけど、ギルは何もしないで！ 動かないで！ ……でも、嫌なら押し返してもいいから」

「は？」

一方的に宣言して新菜はギルとの距離を詰めた。背の高い彼の首に腕を回してぐっと顔を引き寄せる。そして、目の前にある唇に新菜は自分のそれをそっと重ねた。

「——っ！」

びっくりしたようにギルの肩が跳ねる。出会ったばかりの相手にこんなことをする女だって、呆れられたかもしれない。ギルの言動から、この世界の女性はかなりおしとやかみたいだから。けれ

ど、これは確かめておかないといけない。今後の新菜の生活に直結する問題だった。

（できれば軽蔑されたくないな。ギルとはいいい関係でいたいし……）

なんていったって、この世界で今の新菜が唯一頼ることができるのは彼だけなのだから。彼とは今後も良好な関係を築いていきたい。

「んっ……」

新菜は何度か角度を変えて、ギルに唇を押し付けた。鍛えきたられているのか身体は凄く硬いのには彼の唇はしつとりと柔らかい。その感触について夢中になってしまいたいような自分を戒めて、新菜は横目で小瓶を確認した。

ピンク色の液体は、先程より増えている気がする。

（やっぱり、これを溜める方法ってこういうことなの……!?）

でも、量としてはごくわずかだ。目の錯覚だと言ってしまうと、それまでの量しか溜まっていない。

（もっと、溜めるには……）

新菜はごくくりと唾を呑み込んだ。この仮定を裏付けるためには、これ以上進んだことをするしかないだろう。

新菜は緊張しながら舌先を彼の唇にそっと触れさせた。すると、ギルの唇はそれを待っていたかのように薄く開いて、新菜を招き入れる。

新菜はそのまま彼の口腔こうくわう内に舌を進入させた。ゆっくりと歯列をなぞり、彼の肉厚な舌と自分の

それを絡ませる。

「あふ……」

舌のヌメヌメとした気持ち良さに思わず声が漏れる。

ギルは新菜が頼んだ通り身動き一つしない。けれど時折、彼の腕の力が増す瞬間があつて、新菜はちよつと切ない気持ちになつた。

(嫌われちゃつたかな……)

言葉や行動には出さないが、ギルの険しい表情が彼の気持ちを物語っているように思えた。ちゅつと舌先を吸つて唇を離す。

「ごめんなさい」

なんとなく彼の顔が見られず、新菜は俯いたままギルに謝る。

「なんで謝るんだ？」

「嫌そうだったから」

「まさか。驚いただけだ」

「そう。ありがとう」

(できれば犬に噛まれた程度に思つてくれてたらいいな)

素直にお礼を言つて、新菜は小瓶を見直した。

「あ、見て！ ギル！」

瓶の底にうつつら溜まつていたピンク色の液体が、小瓶の五分の一ぐらいにまで増えていた。

「つまり、お前が気持ち良くなつた分だけこの瓶に魔力が溜まると？」

瓶の中を興味津々で眺めていたギルが、新菜に視線を向けて確認してくる。

「ま、まあ……そういうことみたいね」

はつきり言われると、なんだか無性に恥ずかしい。

言葉も何もわからない異世界で、この瓶の魔法は凄くありがたい。ありがたいが……

「なんか、もうちよつと違う方法はなかったのかな……」

そう呟きながら、新菜は深く項垂れた。

第二章

王都へ向かうのはもう少し準備を整えてからにするようで、出発はどうやっても数日後になるのだという。新菜はギルが買ってきてくれたこの国の服に袖を通し、その足で治療院へと連れて行かれた。もちろん、背中の痣を治すためである。治療院というのは回復魔法に特化した魔法士や魔術師が人々の治療をする施設なのだそうだ。

新菜がそこで治療を受け、部屋に戻つて来た時には、時刻は昼過ぎとなつていた。二人は机を挟んで向かい合わせに座り、ギルの調達してきたパンと蒸し鶏で少し遅い昼食を取る。

今の新菜の格好は、白いワンピースにオーバースカート、赤いエプロンに同じく赤い襟布をつけ

ていた。格好だけ見たら、もうこの国の住人と変わらない。

昼食を取っている間、二人はお互いの国について語り合った。ここがどんな所で、どのような文化があるのか。日本がどんな場所で、新菜がどんな生活を送っていたか。単語が上手く伝わらない時もあったが、聞き上手なギルのおかげで会話は途切れることなく続いていくと思われた。

新菜が思い出したように、その言葉を口にするまでは……

「ねえ、ギル、この辺で男娼が買える娼館知らない？」

「は？」

その言葉を聞いたギルは一瞬固まり、直後、眉間に深く皺を寄せた。

彼の変化に慌てた新菜は、急いで言葉の続きを口にする。

「いや、その、このままじゃ私、すぐにまた言葉がわからなくなるでしょう？ その前にたくさん魔力を補充しといた方がいいかと思って……。あ、心配しないで、ちゃんとその分のお金は自分で稼ぐから。ギルには面倒かけないつもりよ。でも、お金を稼ぐ間、数日間は王都への出発を遅らせてもらえると思うんだけど……」

新菜がそうフオローを入れると、ギルの眉間の皺が更に深くなった。

怒っているような、ではなく、これは確実に怒っている。どうして彼が怒っているのかわからない新菜は、ビクビクしながら彼の返事を待つ。

そうして出された彼の第一声は、地を這うように低かった。

「……………一応聞いておこう。お前は男娼を買ってどうするつもりだ？」

「えっ、いや、まあ、それはね。……ほら、わかるでしょ？」

魔力を溜めるために必要なのは、新菜が『快感を得る』ことだ。かといって、ああしたことは誰にでも頼めるものではない。だったら、専門の人にお願いしようと考えたのだ。

さすがに男娼に足を開くことはできないが、先程ギルとしたようなキスならば我慢すればできないでもない。

とりあえず、この小瓶に魔力がないことには新菜はコミュニケーションが取れないのだ。王都までどれくらいかかるかわからないが、せめてこの小瓶いっぱいになるくらいには魔力を溜めてから王都に向かいたい。

新菜をじつと見つめていたギルは盛大に顔をしかめた後、重々しく口を開いた。

「そうか。しかし、娼館は成人を迎えていないと入れないぞ」

「あ、そうなの？ ちなみに、こっちの成人って何歳？」

「二十歳だ」

「じゃあ、大丈夫ね。私、二十五歳だから」

ホツとして軽く言った新菜に、ギルがひっくり返ったような声を出した。

「に、二十五!？」

ギルは新菜を見て目を白黒させている。その様子から年相応に見えていなかったのだと気付いた。確かに元の世界でも西洋人に比べて東洋人は若く見られる。そこで新菜は先程のギルの怒りの正体を知った気がした。確かに子供が男娼を買おうと言い出したら怒るだろう。

「うん、心配してくれてありがと。見えないかもしれないけど、私成人してるんだよね」

「俺はてつきり十七、八歳くらいかと……」

「え？ そんな若く見えたの？ やだー、現役高校生に見えるとかギルもお世辞が上手ね」

「ゲンエキコウコウセイ？ またわけのわからん単語を……。いやそんなことより、二十五だと!? 本当なのか!？」

「本当ですけど」

ギルのあまりの驚きように新菜は首を傾げる。彼は何をそんなに驚いているのだろうか。確かに新菜は小柄だが、そこまで童顔というわけでもない。どちらかというところ、昔から少し大人びていると言われてきたくらいだ。

新菜の視線にギルはふいつと顔を逸らした。

「いや、確かにお前は若く見えるが……」

「ん？」

「……その胸と尻はどこからどう見ても発展途上だろう？」

次の瞬間、新菜はこの世界に来て二度目の平手打ちをギルにぶちかましていた。

新菜のコンプレックスは貧乳・貧尻。

彼女に対してギルが発したその言葉は、絶対に言っではいけない言葉だった。

その光景は、端から見たらかなり異様に映っただろう。

十代に見える黒髪の少女が、三十過ぎの赤髪の大男を従えてリヒシユタツトの往来を歩いているのだ。しかもその大男は機嫌が悪そうな少女にしきりに謝っている。

親子には見えないが、かといって兄妹というわけでもなさそうな二人は、往來の視線をこれでもかと集めながら歩いていた。

「悪かった」

「はい、黙って。さっさと娼館に案内する」

「いい加減、機嫌を直してくれ」

一歩先に行く新菜に追いつき、ギルは顔を覗き込んでくる。そんな彼を押しつけて、新菜は更に足早に歩を進めた。

「誰のせいだと思ってるのよ、このセクハラオヤジ！ こんなことなら、森で待ってるサリーに案内してもらえばよかった！ サリーは賢いから、きつと私を娼館まで連れてってくれたはずよ。一緒に行動してもこんなに目立たなかっただろうし！ 私も怒らなくて済むし！」

「目立っているのにはお前にも責任の一端が、だな……」

新菜の剣幕にたじろぎながらギルがそう口を挟む。すると、彼女は般若の形相で振り返り、怒りに染まり切った声を出した。

「……何か言った？」

「いや……」

ふいつとギルに目を逸らされて、新菜はますます気炎を上げた。

「なによ、胸と尻に脂肪がついている奴の方が人生のヒエラルキーの上位に立ってるってことくらいは知ってるわよ！ 知ってるけど、自分ではどうにもならないんだから仕方ないじゃない！」

「俺は大ききなんて関係ないと思うぞ！ むしろ、俺は形とか感度の方が重要だと思う。その点お前は……」

「チエストー!!」

「がっ！」

新菜は早々に三度目の平手打ちをギルにお見舞いした。ついでに腹も殴っておいた。

「それがセクハラだって言ってるでしょ！ もう口を開かないで！ 黙って歩く！」

「はい」

新菜のあまりの剣幕にギルは青い顔をして従うしかなかった。

それからしばらく歩いて、ギルはある建物の前で立ち止まる。

「着いたぞ」

ムスツとしたギルの声に、新菜は目の前の建物を見上げた。

三階建ての建物は、コンクリートのようなモスグリーンの石壁に、飾り窓が左右対称に付いている大きな屋敷だった。

両開きの豪華な扉から支配人らしき男が出てきて、恭しく二人を出迎える。

「いらつしやいませ。今日は旦那様のお相手を探しに？ それとも、そこのお嬢さんの身売りをご希望ですか？」

「あ、私の相手を探しに」

眼鏡をかけた上品そうな男は、新菜の言葉に眉を上げて驚いた。

「ほお、それはそれは……」

「あ、でも、今日は下見というか……、どのぐらいの金額で買えるのか事前に知っておきたい。それだと、やっぱり入れてもらえませんか？」

新菜は最初に今日は下見するために来たのだと告げる。入った瞬間に、「さあ買え！」と迫られても困るからだ。

彼女のその言葉に、支配人らしき男は別段気分を害した風でもなく笑って頷いてくれた。

「よろしいですよ。さあ、どうぞ」

その対応から、ここはとんでもなく高級な娼館ではないかと思った。

もちろん、新菜は娼館に行ったことはない。日本でだって風俗に行ったことなどない新菜である。しかし、行ったことがない場所でも、イメージというものはある。ここはなんと何か厳かな雰囲気おしとやかなが漂う、銀座の高級クラブのようだ。中に入って、その印象は確信に変わった。

「うわー……」

頭上には大きなシャンデリアが吊り下がり、床には染み一つない真っ赤な絨毯じゅうたんが敷かれていた。

そして、長い階段を下りたその先には、色とりどりのドレスに身を包んだ美しい女性達の姿がある。

「ギ、ギル！ ギル！ ここ凄く高そうだよ！ 私もっと安い所がいい！」

彼の袖を引っ張りながら新菜は小声でそう言う。そんな彼女を、ギルは冷たい瞳で見下ろした。

「残念だが、この街で男娼がいる娼館はここだけだ。金が払えないなら男娼なんて早々に諦めることだな」

「……なんかギル、機嫌悪い？」

「悪くない。胃がムカムカして死にそうなだけだ」

眉間に皺しわを寄せたままギルがそう言ったところで、支配人の男が色気いろけの漂たなよう男性を三人程連れてきた。一人は少年のように可愛らしく、もう一人は引き締まった体躯たいくを持つなかなかの美丈夫びしよつぷだ。最後の一人も独特の色香いろかを持つ長髪ながみの気急けいそうな男だった。

三人三様、タイプは違うがなかなかのイケメン具合である。新菜はその揃そろった顔ぶれに引きつった笑みを浮かべた。

(た、高そう……)

しかし、生理的に受け付けられないということはない顔ぶれだ。その点で考えれば、ここは新菜にとって最適な娼館だったのかもしれない。

(たぶん、キスくらいなら平気かな……)

そう思っていると、低い声でギルが支配人に値段を聞く。しかし、この世界に来て間もない新菜に当然貨幣価値かちがわかるわけもなく、結局どのくらい働けば彼らの一晚いちばんが買えるのか、ギルに説明してもらったこととなった。

「一ヶ月のお給料と同じ!? 一晚が!？」

「あくまで平均的な月収だがな」

これで諦めがついたか? そう言いたそうな表情でギルは腕を組んだまま新菜を見下ろした。

結局、新菜は男娼を買うのを諦めざるを得ない現実を目の当たりにし、さすが娼館から退散するしかなかった。

「どうしよう……」

部屋に帰ってきた新菜は紐ひもをつけてペンダントのように首から下げた小瓶せうびんを夕日にかざす。空にはすでに夜の藍あざが覗のぞき始めていた。もうすぐ夜がくる。

(あーあ、いい案だと思っただけだな……)

まさか男娼が、あんなに高いものだとは思ひもしなかった。とてもじゃないが、新菜が数日稼かせいでどうにかなる金額ではない。

まあ、働く場所もないのだが……

新菜としては、日雇いや短期バイトのつもりで一日数時間でもどこかで働けたらと思っていたのだが、自分が根本的な労働条件を満たしていないと教えられたのだ。

ギルが言うには、魔力を自在に使えない新菜がこの街で働くのはかなり難しいらしい。

ほとんどの人間が魔力を持ち魔術を使って生活している国では、仕事も当然魔力を使ったものとなる。いくら魔力を溜めることができて、新菜にそれを操さることはできない。

今後、使えるようになるかもしれないが、今の新菜が就ける仕事はこの街にはないに等しいのだそう。王都に行けば魔力がない者や魔法を操れない者でも雇よつてくれるところがあるらしいのだ

が、この街くらいの大きさでは、それこそ娼婦くらいしか仕事がないとのことだった。

昼の段階で全体の五分の一程あったピンク色の液体は、瓶底が透けるまでに減ってしまっていた。(もう一度ギルに頼む？ でもこれ以上、彼に迷惑をかけるのもなあ……)

最初にキスをした時の何かに耐えるようなギルの表情を思い出し、新菜は心が重くなるのを感じる。

(やっぱり、嫌なんだろうな。ああ見えて結構女性の理想が高そうだし、暴力女とキスなんてしたくないよね……)

新菜は深いため息をついた。

正直に言えば、新菜は出会ったばかりの男娼より、ギルとキスをする方がいい。

いくらセクハラ発言があっても、基本的に彼は真面目で誠実な男性だ。出会ってまだ一日だが、彼は信用に足る人物だと思っている。

だからこそ、彼にこれ以上迷惑をかけるのは気が引けた。だけど……

ギルにキスを頼むか、それとも他の方法を考えるか。

「どうかしたのか？」

机に肘を付けて俯いたまま、内心でぐるぐる葛藤している新菜の顔を、後ろから来たギルが心配そうに覗き込んできた。

新菜は、その男らしい顔をじっと見つめる。

小瓶の中の魔力も少ない。ここは、彼に我慢して協力してもらおう他ないだろう。

「ねえ、ギル」

「なんだ？」

「今日だけでもいいから、魔力を溜めるの手伝って欲しい」

新菜が遠慮がちにそう言うと、ギルは少し拗ねたようにそっぽを向いた。

「今更か。俺は男娼の代わりはご免こうむる」

勇気を出して頼んだ新菜のその願いを彼は一言で突っぱねる。新菜は眉を下げながら困ったように頬を掻いた。

「うーん、むしろ男娼の方がギルの代わりだったんだけど」

「は？ 逆じゃなくて？」

「逆じゃなくて」

驚いた声を出して、ギルはその場で固まった。まるで真意を探るかのようじっと新菜を見つめている。

「……」

「……ねえ、やっぱり嫌かな？」

その場合、最悪路上で見知らぬ男性に声をかけないといけなくなるのだろうか。できればそれはやりたくない。けれども本気でギルが嫌がるなら、新菜は無理強いすることはできなかった。

ギルは何も言わず、強張った顔で新菜を見つめている。

その表情が全てを物語っているようで、新菜はため息を一つついた。

「うん、わかった。じゃあ、いいや。何か別の方法考えるから……変なこと聞いてごめんね」
新菜は笑顔を開り付けたまま手を振る。そのまま頭を下げて、まだ驚いた顔でギルは固まっていた。

キスだけなのにそんなに嫌なのか……そう思うと胸が少し苦しくなる。確かに自分は女性としての魅力に乏しいかもしれないが、あんな表情をされる程嫌がられたことは過去になかった。

こうなったら、本気で路上で男漁りをしなくてはいけないらしい。
神様はなんて運命を自分に授けたのだろうか。彼氏に浮気されたあげく、突然跳ばされた異世界で男漁りをしなくてはいけないなんて……

新菜は路上で男に唇を強請る自分を想像し、あまりの気持ち悪さに吐き気がした。

それでも、この世界で生きて行くには魔力が絶対に必要だ。少なくとも日常会話を覚えるまで、新菜はこの魔法陣に頼らなくてはいけない。

覚悟を決めた新菜は、おもむろに席を立つ。

「……どこへ行く気だ？」

ふらふらと扉から出て行くこうとする新菜をギルが止める。

「んー。聞かないで欲しいかな」

男を漁りに行くなんてはしたくないこと、ギルには言いたくなかった。

「……お前まさか……」

新菜はギルの視線から逃れるように俯く。

「ダメだ！ それは本当にダメだ、危険すぎる！ 路上で男を誘うなんて真似を俺が許すと思うのか！」

「だって……」

じゃあ、どうしろというのだ。男娼は高すぎて買えない。ギルに頼むこともできない。このままではじきにまた、魔力切れで意思疎通ができなくなる。新菜は正直、もういっぱいだった。

「どうして、もうちょっと俺を頼ろうとしない！」

ギルが怒ったように新菜の肩を掴んできた。

「頼ったじゃない！ 断ったのはギルでしょう……」

「断ってない！ 少し驚いていただけだ！」

その言葉に、新菜は戸惑いつつ彼を見上げる。

「……じゃあ、してくれるの？」

「ああ」

ずいっと顔を近づけてきたギルに、新菜は思わず後ずさった。

なんだか、彼の雰囲気は先程までと違う気がするのはいくらだろうか……

「二ーナ、俺でいいんだな？」

「え？ う、うん。もちろん」

自分の名を呼ぶギルの声がやけに甘く聞こえて、新菜は背筋を震わせながら彼を見上げた。

ギルの赤い瞳は新菜を映してゆらゆら揺れている。その赤い瞳の奥に、はっきりと情欲を感じ取

だが、ギルは新菜の口に親指を入れて、無理矢理開かせた。溢れた唾液が彼の腕を伝っていく。新菜の下顎を掴んだまま、ギルは新菜の舌をしゃぶる。じゅつと音を立てて吸われた後、新菜の舌先をギルが甘く噛んだ。

「んっ……ああー!!」

抗議するように声を出すと、ギルは少し笑って下顎から手を離した。

その手は新菜の身体を流れるように滑り、彼女の服を脱がしにかかる。いつの間にかワンピースをたくし上げていた手が、新菜の太腿から胸元までを一気に撫で上げた。

「ひゃああんっ!!」

直接肌に触れた手の感触に、新菜の背筋がゾクゾクと震える。全身が栗立ち、まるで期待するみたいに、じゅん、つと下半身が疼いた。

新菜は自分の反応に戸惑い、必死にその快感に耐える。自然と彼のシャツを掴む手が震えてしまった。目ざとくそれに気付いたギルは、意地悪く微笑み新菜の耳に唇を寄せる。

「ここがいいんだっとな……」

次の瞬間、くちゅり、という粘着質な音が新菜の頭に直接響く。そして、いやらしい手つきで背中を撫で回された。

「ひっ! や、やだっ……っ! ギルっ! 耳も、せ、せなかも、やめっ……ひゃああんっ!」

耳の穴に舌を差し込まれて、くちゅりくちゅりと隅々まで舐められる。耳朶を噛まれて、再び新菜の身体がビクンと跳ねた。背中もいやらしい手が何度も何度も往復を繰り返している。

「右の次は、左だな」

耳元でそう囁いたギルが、あっという間に左に移動する。そしてそのまま左耳に舌をねじ込まれた。

「あっ!! やだあ……。ギル——んっ! やあ、やめてえっ!」

「可愛いよ、ニーナ」

「は、ひゃあん——っ! みみもとでっ! んっ!」

「ニーナは耳もいいのか?」

ギルが新菜の目尻に溜まった涙を舐め取りながら、そう聞いてくる。新菜はがくがくと震える身体を抱き締め緩く首を振った。

「わかん、ない……」

「なら、わかるまでしようか」

「やっ!」

新菜は目の前に迫るギルの顔をぐっと押しやるが、抵抗むなしく両手首を掴まれ壁に際(はたひ)にされしてしまう。ギルは互いの手の指を絡ませて優しく微笑んだ。そして唇を新菜の唇に合わせる。

「んっ……はっ、んっ……」

「ん……」

貪るように唇を吸いながら、ギルは新菜の両手首を片手で固定し直した。そしてもう片方の手で彼女の素肌をなぞる。スカートの中に侵入してきたギルの手は、新菜の下着の上から、濡れ始めた



隙間をゆっくりとなぞり上げた。

「んー！ んー！ んー！」

本気で貞操の危機を感じ、新菜は唇を塞がれたままギルの手から逃れようと必死に身を振る。しかし、ぴくりとも動かないギルの腕に新菜は半泣きになった。すると、ギルは新菜から唇を離し、切なそうな目を向けてきた。

「やっぱり俺は嫌か？」

「な、何を言ってるの？」

「俺より、見ず知らずの男娼に抱かれる方がいいのか？」

少し息を詰めたような表情でギルは新菜を見つめる。その少し悲しげな表情に新菜は声を張った。

「そんなわけないでしょ！」

「そうか。よかった」

「——っ！」

本当に嬉しそうに微笑まれ、新菜は二の句が継げなくなる。

おまけに彼は、会話の間にも新菜の身体をまさぐっているのだ。きっと、ギルの経験値はかなりのものなのだろう。新菜のオーバースカートとエプロンは、いつの間にか脱がされて床に落とされている。その手際の良さたるや感心する程だった。

それはそうだろう。控えめに言っても彼はかなりの色男だ。通った鼻筋に燃えるような瞳。黙っていても男性としての色気が滲み出ている。

おまけに、服の上からでもわかるぐらい、しっかりと鍛えられた逞しい身体をしているのだ。そんな男性を、女性が放っておくはずがない。

彼の甘いマスクと逞しい身体で迫られたら、どんな女性だっていちころだ。それは、新菜として例外ではない。すでに、これでもかと体温が上昇しているのを肌で感じる。頭が沸騰しそうなくらい熱い。

そんなことを考えている間に、ギルの指が下着の縁からそっと中に侵入してきた。

「ひゃあっん！」

新菜の口から思わず甲高い声が出る。

「……ニーナ」

ギルは蕩けるような甘い顔をして、新菜の首筋にキスを落とした。湿った音を響かせながら強く吸い上げ、赤い花を咲かせていく。ギルは自分の付けた痕を見て満足そうに舌で唇を湿らせた。

新菜にはそれが、獲物を前にした肉食獣の舌なめずりのように見える。

本能的な危機感を感じて、新菜は思わず声を張った。

「本当にちよっと待って！」

「待てない」

内臓に響くようなその声に全身が粟立つ。ギラギラと情欲を混えた瞳が新菜を鋭く射る。

ギルの手は新菜の素肌を流れるように滑り、躊躇うことなくその胸を揉みしだいた。

「んあっ……あああああっ！」

容赦なく胸の頂を押しつぶされて、新菜は震えながら甘い声を響かせる。

「いいぞ、ニーナ」

何がいいのかわからない。新菜は溶けた思考で必死にこの状況から抜け出す方法を考えた。しかし、彼女の意思とは裏腹に身体は快感に正直で、背筋をビクつかせながら蜜垂を潤わせる。

ショーツの中に侵入していたギルの指が、ぐちゅりと音を響かせながら押し入ってきた。

「濡れているな。……もうドロドロじゃないか」

ギルが嬉しそうに新菜の耳元で囁く。

「……っ!!」

新菜のそこは彼の指を更に呑み込まんと無意識に肉をひくつかせている。

「欲張りな身体だな。もう俺が欲しいらしい」

「言わないでえ——っ！ んっ!!」

ギルが新菜の花びらを押しつぶす。甘い痺れが身体中に広がって、新菜は身体をびくびくと痙攣させた。その瞬間、ギルは新菜の花芯を摘み上げる。

「んやあんんっ——!!」

新菜の視界に火花が散った。

いつの間にか自由になっていた両手で、新菜はギルの頭を抱き込む。そのまま弓なりに背中をそらして達してしまった。

「あと、何回イきたい？ 好きなだけイかせてやろう」